ナチス・ドイツによる強制収容と犠牲者数に関する研究
～ポーランド南部及び東部の現地調査を通じて（Ⅰ）～

青山貞一（東京都市大学環境情報学部）、池田こみち（環境総合研究所）

第２次世界大戦中、欧州ではナチス・ドイツによってポーランドを中心に、ドイツ、オーストリア、リトアニア、ラトビア、エストニア、イタリア、フランス、オランダ、ベルギー、旧ユーゴ、旧ソ連、ウクライナ、ベラルーシュなどの国々に、いわゆる強制収容所が多数設置、運用され、ユダヤ人を中心に多くの人々が犠牲となった。本論では、ポーランドのアウシュビッツ、ビルケナウ、マイダネク、ソビボル、ベルゼック、トレブリンカなどガス室・焼却関連施設をもつ大規模な強制収容施設についての現地実態調査をとりまとめるとともに、関連各国における第３者による歴史考証や実態調査、さらに収容所、収容数、犠牲者数に関する文献・資料調査をもとに、ポーランド及び欧州各国どの主要収容所を現地視察、現地資料収集することにより犠牲者数の推計を試みた。

■アウシュビッツⅠ、Ⅱ、Ⅲの強制収容所

以下はアウシュビッツ強制収容所（第１、第２、第３）の歴史の概要である。

1940 年 5 月 -アウシュビッツ第一強制収容所（基幹収容所）が親衛隊(SS)全国指導者ハインリヒ・ヒムラーの指示により、ドイツ国防軍が接収したポーランド軍兵営の建物を利用して開所する。ここでは強制収容所における画一的な管理システム、いわゆるダッハウモデルを踏襲している。初代所長は SS 中佐ルドルフ・フェルディナント・ヘス。

1941 年 - 最初のガス施設（クレマトリウム 1）が第一強制収容所に完成。 10 月に 収容者増のため、ブジェジンカ村に大規模なアウシュビッツ第２強制収容所、ビルケナウ強制収容所を建設する。

1942～1944 年 –アウシュビッツ近くのモノビッツ村周辺に当時ドイツを代表する大企業の製造プラントや近隣の炭鉱に付随する形で大小合わせて 40 ほどの収容施設を建設する。同施設はアウシュビッツ第３強制収容所モノビッツとも呼ばれる。

1945 年 1 月 27 日 – アウシュビッツ系強制収容所、ソ連軍により解放。

1947 年 4 月 16 日 - 初代所長ルドルフ・フェルディナント・ヘス、アウシュビッツ内で絞首刑に処される。

1979 年 -アウシュビッツ強制収容所としてユネスコ世界遺産に登録。

2007 年 6 月 27 日 -世界遺産登録上の名称をアウシュビッツ=ビルケナウ－ドイツ・ナチの強制・絶滅収容所（1940 年-1945 年）に変更。

■アウシュビッツⅠ、Ⅱ、Ⅲの収容数、殺害数

1944 年 1 月時点でのビルケナウ収容所の女子囚人は、2 万 7,000 人であったが、1944 年 8 月時点での囚人数は 10 万 5,168 人となっている。アウシュビッツに収監された累計約 250 万人のうち、40 万 5 千人に囚人番号が付与された。そのうち 50%がユダヤ人残りはポーランドなど他国人であったとされ生存者は 6 万 5 千人に過ぎない。1942 年 1 月～1942 年 3 月 収容者 17 万 5 千人がガス室で殺害され 1942 年 8 月にはビルケナウ収容所で大型の新式ガス室建設計画が始まり 1943 年 3 月末に一部が稼動可能になった。1943 年 4 月～1944 年 3 月のビルケナウのガス室でチクロン B による殺害は 16 万人と推定されている。

1944 年 3 月～1944 年 11 月、他収容所からの囚人に加えハンガリー系ユダヤ人、ポーランドのゲットーからのユダヤ人を受け入れる。うち 58 万 5 千人がガス室で殺戮される。

1945 年 1 月 27 日、ソ連軍がアウシュビッツを解放。その時、女性衣類は 83 万 6,525 点、男性衣類は 34 万 8,820 点、靴が 4 万 3,525 点発見されている。

上述のアウシュビッツⅠ、Ⅱ、Ⅲの３つの強制収容所における犠牲者数だが、当初アウシュビッツを解放したソ連軍により 600 万人とされ、次いで 400 万人と修正された。その後アウシュビッツ関連裁判でルドルフ・ヘスは 250 万人と証言している。1995 年、アウシュビッツ・ビルケナウ博物館の入り口には、“About one and a half million men, women, and children mainly Jews from various countries of Europe” すなわち、殺害された数は 150 万人であると記されるに至っている。

■国別、人種別の強制収容数

下の写真は、アウシュビッツ強制収容所（第１収容所）に展示されていたアウシュビッツ施設に強制収容された人数、犠牲者数などの情報である。

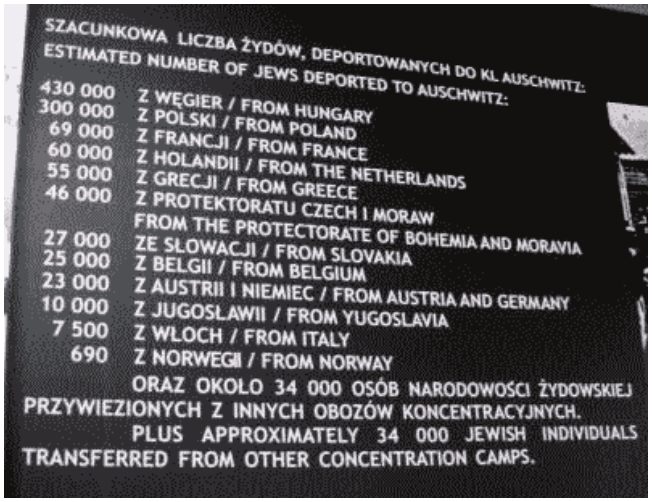
アウシュビッツ強制収容所は、1940 年から 1945 年の間に少なくとも 130 万人の人々が送り込まれ、110 万人、すなわち 85%が犠牲者となっており、その 90%がユダ

ヤ人であるとされている。

国、地域別で見ると、強制収容された130万人のうち、110 万人がユダヤ人、ポーランド人が 14～15 万人、ジプシーが２万３千人、ソビエトの捕虜が１万５千人、その他のグループが２万５千人と書かれている。

撮影：青山貞一　Nikon Cool Pix S10 2009.3.10

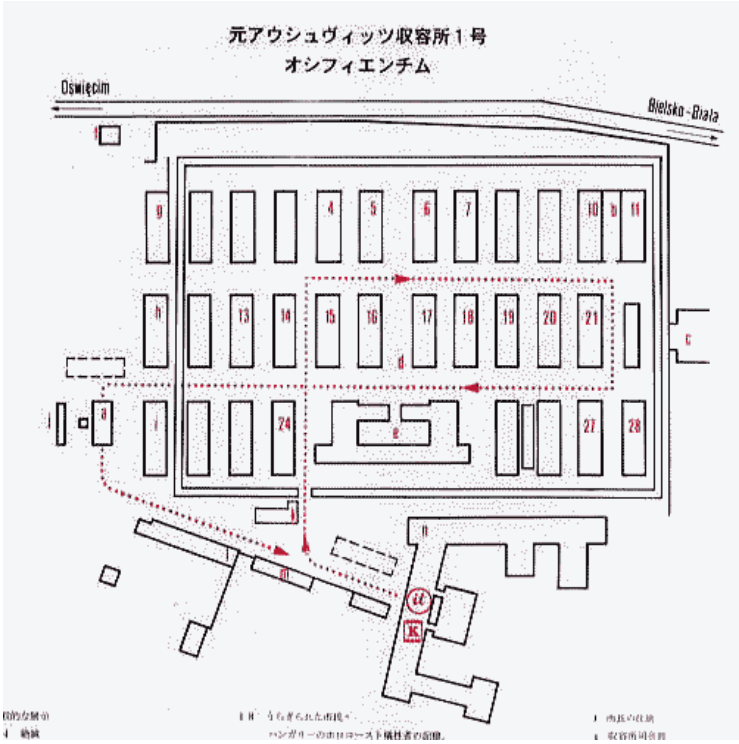
以下はアウシュビッツ施設に送り込まれたユダヤ人のもともとの居住国である。ハンガリーから送り込まれたユダヤ人が一番多く、43 万人、次に地元ポーランドが30 万人で２番目、３番目がフランスで６万９千人、４番目がオランダからで６万人、５番目がギリシャで５万５千人、６番目がチェコで４万６千人、７番目がスロバキアで２万７千人、８番目がベルギーで２万５千人、９番目がオーストリアとドイツで２万３千人、10 番目がユーゴスラビアで１万人、11 番目がイタリアで７千 500 人、12 番目がノルウェーで 690 人、その他として他の強制収容所から３万４千人がアウシュビッツに送り込まれたとされている。



撮影：青山貞一　Nikon Cool Pix S10 2009.3.10

■アウシュビッツの主な施設

ここでは現在博物館となっているアウシュビッツ強制収容所の主な施設、展示物を紹介している。



●全般的展示

４：絶滅行為に関する展示

５：犯罪行為の証拠に関する展示

６：囚人の生活に関する展示

７：囚人の居住・衛生状態に関する展示

１１：死のブロック

●関係各国の展示

１３：欧州ロマが絶滅されたことに関する展示

１５：ポーランド展示

１６：スロバキアのユダヤ人に関する展示
　　チェコからの囚人に関する展示

１７：ユーゴスラビア、オーストリアに関する展示

１８：ハンガリーのホロコースト犠牲者に関する展示

２０：フランスからアウシュビッツに強制連行者に関する展示。同ベルギーに関する展示

２１：1940－1945 年のオランダのユダヤ人迫害と強制連行に関する展示。同イタリアに関する展示

２７：ユダヤ人の受難の歴史に関する展示

●重要施設

a：ガス室・焼却炉

b：:死の壁

c：チクロン B/囚人持参物の倉庫

d：点呼広場・集団絞首台

e：収容所の厨房

f：所長の住居

g：収容所司令部

h：ＳＳ管理局

i：ＳＳの病院

j ：ゲシュタポ司令部
k：ＳＳ衛兵所・収容所事務室
l ：ＳＳガレージ
m：管理棟
n ：囚人受け入れ場所
10：断種実験室
19，20，21，28：収容所内の病院

なお、本論考の主な出典、引用は国立オシフェンチム博物館、アウシュビッツ・ビルケナウ案内書によっている。

●「死の壁」「黒い壁」

視察場所：右上の 10 番（10 号棟）と 11 番（11 号棟）のバラックの間 b の上側（北側にある）

10 号棟と 11 号棟の間にある中庭は、両側から高い壁で仕切られている。10 号棟の窓に取り付けられている木製の窓枠は、中庭で行われていた死刑執行を見られないための細工であった。

The Black Wall at Auschwitz I, used for executions
撮影：青山貞一　Nikon Cool Pix S10 2009.3.10

この「死の壁」あるいは「黒い壁」（Black Wall）と呼ばれる壁は、ＳＳ隊員が数千人規模の囚人、とくにポーランド人を銃殺するために使った、すなわち死刑執行（虐殺）のために使用された壁であり、現在もほぼ原型のまま残っている。「死の壁」は、ふたつのバラックの間にある。11 号棟（下の写真では右側）は収容所から隔離された収容所内の刑務所でありその１階と地下はそのまま残されている。

なお、生き残った囚人、W. Siwek 氏がアウシュビッツ収容所を描いた絵画の中にもこの「死の壁」に関するものが残っている。右の絵画は W. Siwek 氏がアウシュビッツ収容所を描いた別の画である。背景にある建築物はアウシュビッツ収容所Ｉのゲート近くの建築物に似ている。囚人らは銃殺された人びとを埋める大きな穴あるいは地下室を掘らされていたのであろうか？

右側（11 棟）の手前にある最初の部屋はＳＳ隊員が勤務していたが、その他の部屋には臨時裁判の判決を待つ囚人たちが監禁されていた。

W.　Siwek 氏が描いた「死の壁」
撮影：青山貞一　Nikon Cool Pix S10 2009.3.10

臨時裁判官は、アウシュビッツのとなりのカトヴィツェしからアウシュビッツに来て、10 号棟（左の棟）の手前の最初の部屋で２，３時間の間に数 10 から百数十の死刑判決を出したという。

死刑判決を出された囚人たちは、「死の壁」の前に連行された。銃殺される前に、囚人たちは廊下の真ん中にある脱衣場で裸にされた。銃殺予定の囚人が少ない場合は脱衣場で死刑が執行されることがあったという。

この種の銃殺による虐殺は、アウシュビッツ博物館の展示写真にあるように他の場所でも行われていた可能性がある。

●チクロンＢによる集団虐殺実験棟

11 号棟の地下の一室で 1941 年９月に毒薬チクロンＢを使って集団虐殺の実験が行われている。その実験では約 600 名のソ連軍捕虜と収容所内の病院に入院中の 250 人の患者が犠牲となっている。

撮影：青山貞一　Nikon Cool Pix S10 2009.3.10

11 号棟の地下の監房では「地下の掃除」と呼ばれる囚人の選別をＳＳが行っていた。選ばれた囚人は懲罰班に行かされるか、銃殺された。11 号棟の地下では３種類の監房を見ることができる。その多くは尋問中の囚人が入

れられた監房である。

一方、11 号棟地下の 18 号室は、餓死を宣告された囚人が入れられた監房である。他人の身代わりになって死んだポーランドのマクシミリアン・コベル神父も 1941 年にここに入れられた。20 号室に入れられた囚人は窒息で死ぬこともあった。22 号室には 90cm×90cm の「立ち牢」がある。ここには一度に 4 人が収容されたという。

撮影：青山貞一　Nikon Cool Pix S10 2009.3.10

立ち牢は韓国ソウルの西大門刑務所でも見たが、ナチス・ドイツ、日本軍いずれもすることは似ていると感じた。そう言えば旧日本陸軍にも 731 部隊と言って中国で細菌・化学戦研究の為に生体解剖などを行ったとされている部隊があった。初代部隊長の石井四郎（1892 年 ー 1959 年、陸軍軍医中将）に因んで石井部隊とも呼ばれる。実はアウシュビッツにも、類似の部隊があった。

●人体実験

ＳＳの医師は囚人たちを犯罪的な医学実験の材料として使っていたのである。場所は 11 号棟の隣、10 号棟の２階である。ナチスのドイツ人医師たちは、被収容者をさまざまな実験の検体として扱った。いわゆる「人体実験」である。第 10 号棟ではエルンスト・グラヴィッツ、カール・ゲップハルト、ホルスト・シューマンらがスラブ民族撲滅のために男女の断種実験を行っていた。またヨセフ・メンゲレ博士は遺伝学や人類学の研究として、双子や身体障害者を使った実験を行っている。

アウシュビッツ収容所では他にも新薬の投与実験などさまざまな人体実験が行われていたとされている。例えば囚人たちの皮膚に有害物質を塗布したり、皮膚移植を行っている。実験中に死亡した者は数 100 名にのぼり、生き残った人々にもいろいろな傷害が残ったと言う。

戦後、同様に人体実験を行った日本の 731 部隊がアメリカに研究成果を引き渡したことで罪を不問とされたのに対し、ニュルンベルク裁判などはこれらの行為を医療犯罪として裁いた（医療裁判に概要）。また、裁判の結果を受け、医学的研究における被験者の意思と自由を保護する「ニュルンベルク綱領」が示された。

●絞首台

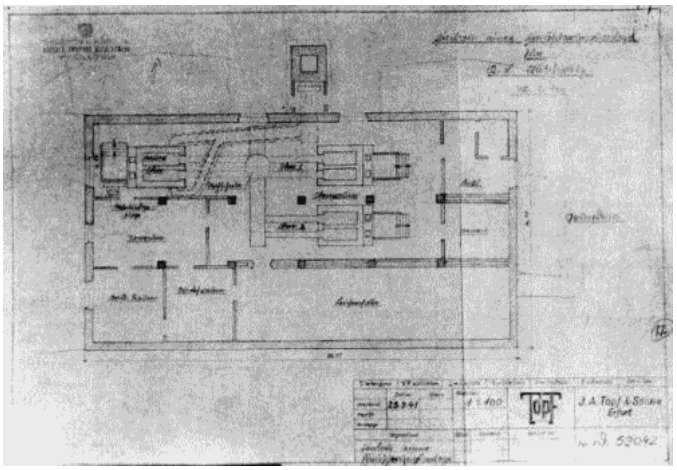
アウシュビッツ強制収容所視察の最後に訪れたのは、かの有名な人体焼却炉である。アウシュビッツの人体焼却炉は収容所を取り囲む有刺鉄線のすぐ外側にある。その入り口の前に絞首台がある。終戦後の 1947 年 4 月 16 日に、アウシュビッツ収容所の元所長、ルドルフ・ヘスの死刑執行がこの絞首台で行われている。

撮影：池田こみち　Nikon Cool Pix S10 2009.3.10

●ガス置室と焼却炉

アウシュビッツ第１収容所（基幹収容所）にある焼却炉１は、1940 年 8 月 15 日～1943 年 7 月までの間稼動している。1 日当たりの焼却数は約 340 名と推定されている。単純に計算すると最大で約 37 万人がアウシュビッツ１で焼却された計算となる。1941 年秋、アウシュビッツ収容所に試験的にガス室が作られ、チクロン Zyklon B を用いソ連軍の捕虜の殺戮を行い、その後、労働不能者やポーランド人死刑囚もここで殺害されていった。

下の写真にある設計図の下側にある大きな部屋は、はじめは死体安置所として使われていたが、その後、ガス室に改造された。



アウシュビッツ I ガス室及び死体焼却施設 I の原設計図
Auschwitz I - Gas chamber and crematorium I. Original blueprint

撮影：青山貞一　Nikon Cool Pix S10 2009.3.10

ここでは1941年から1942年にわたりソ連軍捕虜、シレジア地方のゲットーから移送されたユダヤ人が毒殺されている。絞首台のすぐ隣に前置室を持った人体焼却施設がある。背面から見るとこの焼却炉は半地下式であることが分かる。

アウシュビッツに残るガス室（前置室）の入り口
撮影：青山貞一　Nikon Cool Pix S10 2009.3.10

焼却炉は半地下の施設の中にあり、煙突は約８mほどの高さである。

焼却施設を背景に
アウシュビッツに残る半地下式の焼却施設と煙突
撮影：青山貞一　Nikon Cool Pix S10 2009.3.10

アウシュビッツ博物館には、３台あったうち２台の焼却炉が残されている、そこではおおよそ１日に340人から350人の死体が焼かれていたという。１台の炉には同時に２～３人の死体が入れられたという。囚人の多くは飢餓状態にあり、しかも重労働を強いられた上での虐殺、病死者であり、体重もそうとう減少していたことから一度に２～３人をひとつのオーブンに入れ燃やしたという説は現実性があると実物を見て感じた。

焼却炉自体はドイツのエルフト市にあるトップ・ウント・ゼーネ社が製造した。同社は1942年と1943年にビルケナウ収容所にも４棟分の焼却炉を納入設置している。その社名は炉の一部分に刻印されている。それらの焼却炉は1940年から1943年まで利用されていた。

アウシュビッツ強制収容所に残る人体を焼いた焼却炉
撮影：青山貞一　Nikon Cool Pix S10 2009.3.10

人体の焼却には石炭が使われ、炉の背後から灰が掻き出された。

アウシュビッツ強制収容所に残る人体を焼いた焼却炉
撮影：青山貞一　Nikon Cool Pix S10 2009.3.10

その後、アウシュビッツの第２収容所であるビルケナウ収容所に新たにガス室が建設されると、アウシュビッツ収容所のガス室などは倉庫とされ、親衛隊の防空壕に改造された。この時、焼却炉、煙突、壁の一部は撤去され，屋根にあったチクロンＢの投入口は塞がれた。

何しろこの日は、みぞれや雪が降る寒い一日だった。午後に行ったビルケナウではさらに天候が悪化し横殴りのみぞれとなり、濡れ鼠となってしまった。もっぱら、厳しい場所には厳しい季節に行くと言うのが私のモットーである！

そのⅡへ続く